

甲田遺跡

— 農地整備に伴う発掘調査報告 (KD2011-1) —

2012.03.31 富田林市教育委員会

1. 調査の経緯と経過

市域のほぼ中央部に位置する甲田遺跡は、弥生時代から中世にかけての集落遺跡である。遺跡において農地整備にかかる擁壁設置の計画が持ち上がり、平成23年5月31日に計画地の畠3面（畠A～C）で事前調査を実施した。

同一レベルである畠B、Cには、1～5トレンチを設定した。1、2トレンチでは、現耕作土・床土の下に旧耕作土・床土が前者には1面ずつ、後者には2面ずつあり、堅固でない黄色粘質土を挟んで地山面となる。地山面までの深さは85cm、105cmであった。3～5トレンチは現耕作土・床土の直下が地山で、深さはそれぞれ40cm、35cm、35cmであった。里道を挟んで約70cm高い畠Aに設定した6～8トレンチも、6トレンチを除いて現耕作土・床土の直下が地山面となっており、地山面までの深さはそれぞれ50cm、30cm、20cmであった。各トレンチの地山面のレベルをみると、北東に向かって下降しており、これは現在の地形と合致している。

このように、遺構を確認できないまま調査が進ん

だが、畠A北東隅の9トレンチで溝1条（本調査のSD2）とピット1基（同SP2）を検出した。検出面は深さ45cmの地山面であり、このトレンチと6トレンチには旧耕作土・床土が存在する。南側に追加した10トレンチは、現耕作土・床土の直下が地山面（深さ33cm）で、遺構は認められなかった。

畠B、Cについては、現況面のレベルが9トレンチの遺構（地山）面よりも既に低く、開墾に伴い水平面を確保するための削平が行われたと考えられる。畠A北辺はその削平の度合いが小さく、開墾以前の遺構が残存したのであろう。

以上の経緯から、本調査の対象範囲は畠A北辺の擁壁設置部分(83m²)となった。本調査は富田林市教育委員会文化財課 角南辰馬が担当し、豊島享志と的場尚代の諸氏が参加した。本調査期間は同年6月27日から7月8日で、実働日数は7日であった。

遺物整理作業は同課非常勤職員 栗田 薫が担当し、上田伸子と前野美智子の諸氏が参加した。なお、本書の執筆は3を栗田が行い、それ以外の執筆と編集を角南が行った。



図1 調査位置とトレンチ配置

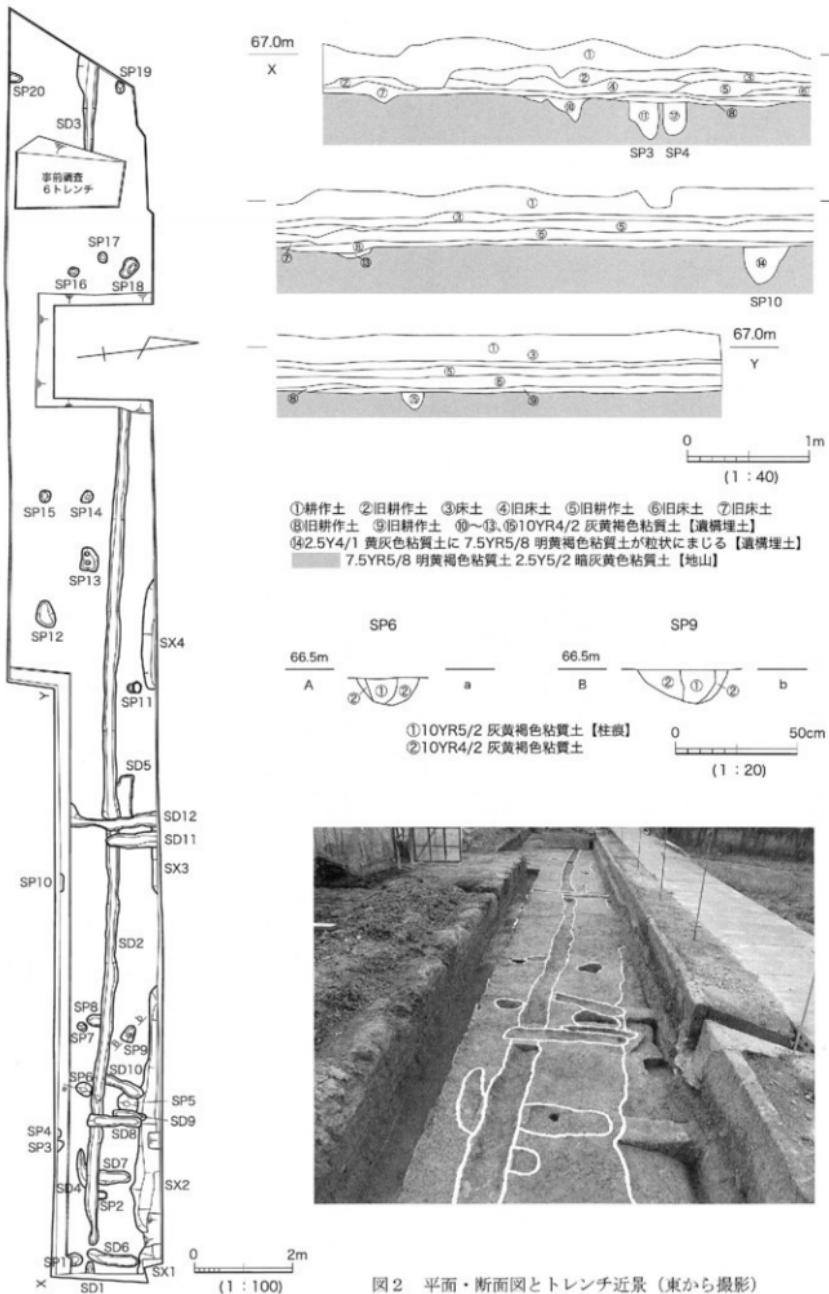


図2 平面・断面図とトレンチ近景（東から撮影）

表1 出土遺物一覧表

| 遺構名 | 路号 | 層位 | 挿図番号 | 出土遺物 | 備考 |
|---------|------|------|--------|---------------------------|-----------------|
| - | - | 2層 | - | 土師器 | 事前調査(10トレンチ)時遺物 |
| - | - | 地山直上 | 図3-2、6 | 須恵器、土師器、瓦器、サヌカイト剥片 | |
| ピット12 | SP12 | 埋土 | 図3-5 | サヌカイト剥片 | |
| 溝2 | SD2 | 埋土 | 図3-1~4 | 須恵器、土師器、瓦器、サヌカイト製背付尖頭器・石刃 | |
| 溝7 | SD7 | 埋土 | - | 土師器 | |
| 溝8 | SD8 | 埋土 | - | 瓦器 | |
| 溝11 | SD11 | 埋土 | - | 土師器 | |
| その他の遺構1 | SX1 | 埋土 | - | 土師器 | |
| その他の遺構2 | SX2 | 埋土 | - | 土師器、瓦質土器 | |
| その他の遺構4 | SX4 | 埋土 | - | 須恵器 | |
| - | - | 表探 | - | 須恵器 | |



図3 出土遺物

2. 検出した遺構

基本層序は、現在のものを含めて耕作土、床土がそれぞれ3面（1～6層）となっており、遺構検出はそれらを除去した地山（7層）で行った。

遺構は溝、ピット、トレンチ北壁沿いの落ち込みがある。溝の大半は鰐溝と考えられ、東西および南北方向に延びる。ピットについては、SP 5、6、7、9がやや歪ではあるものの方形に並ぶことから、1棟の建物を構成する可能性がある。そのうちSP 6と9については、埋土に柱痕跡が残っていた。検出面からの深さはSP 7のみがやや深く約20cmで、それ以外は10～15cmである。このほか、SP13および18には底面に柱痕跡の窪みがあり、SP13は窪みが2箇所存在するなどの底面形状から、2基のピットが重なっているものと思われる。SP 3、4、10、18は検出面からの深さが約30cmであったが、それらについても20cmを超えるものはないため、先述したとおりこれらのピットについても、一定の削平を受けていると考えられる。

各遺構の切り合い関係をみると、SP 2、5、8は溝に切られている。トレンチ壁面から窺える堆積状況からも、これらのピットが機能を終えた後に開墾され、今まで耕作が行われたと考えられる。

3. 出土遺物

今回の調査の出土遺物には、須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器などの土器類と、サヌカイト製の石器資料がある。それらの出土状況は表1に示したとおりであるが、出土状況から特筆すべき意味の窺えるものはない。

土器類はほとんどが小破片で、図示した2点の小皿を除いて、全体の形状がわかるものはない。そのため切り合ひ関係から先後関係の検討ができる遺構、すなわち溝7（SD 7）→溝2（SD 2）→溝8（SD 8）、溝11（SD 11）から出土した土器のように、古→新へと出土遺物の時期変遷の解明ができるものの、小破片のために時期的な検討ができる資料にはならなかった。

一方、時期の判別できる土器資料には、奈良時代から平安時代にかけてのものと考えられる須恵器と、中世の遺物である土師器、瓦器、瓦質土器がある。

ただし須恵器は、表探資料で壊身と判別できるものが出土しているだけで、調査資料には器種の判別できるものはない。中世の遺物は、図示した小皿（図3-1、2）以外では、地山直上から出土した瓦器碗の高台片と、その他の遺構SX 2から出土した瓦質土器がある。前者は押しつぶされたような断面三

角形の高台の付く瓦器楕であることから、13世紀末頃のものと考えられる。一方、後者の瓦質土器は甕の体部破片のため確定しがたいが、外面に繩筋の叩き目が施されていることから、やはり13世紀末頃のものと考えても大過ないであろう。この点では、図示した小皿も13世紀代のものと考えられ、今回の甲田遺跡から出土した中世の土器資料は、13世紀代後半頃のものと限定して考えることができよう。

さて、今回の調査で注目すべき遺物として、旧石器の出土をあげることができる。すでに述べたとおり出土状況の限界から、甲田遺跡での旧石器時代の状況を検討することはできないが、後世の構造をはじめとする擾乱土中に旧石器が2点（図3-3、4）混入していた。サヌカイト資料は合計4点出土しているが、そのうちの2点だけが、型式学的検討から旧石器とすることができる。その一つは基部の二側縁に加工が施された背付尖頭器（4）で、先端部は欠失している。他方は背付尖頭器の素材とするために割り去られた石刃（3）と考えられる。ただし、石刃（3）は、（4）のような背付尖頭器を作る素材としては、厚みが薄すぎて、背付尖頭器の素材には不適当であったことから、トゥールに加工されなかつたと推測できる。残りのサヌカイト剥片（図3-5、6）も、先の旧石器と同じように白色風化していることから、同じく旧石器時代の所産であった可能性が高いと考えられる。しかし（6）の微細剥片はともかくとして、（5）の剥片は、（4）のような

背付尖頭器や（3）の石刃を作るメトードの途中で生じたものではないことは指摘しておかねばならない。もしあえてこれらの資料も旧石器に終るものとするならば、石核調整段階の初期の所産であると想定すべきであろう。ただし、そうであれば原面が残されていないことが気にかかる。

一方、（6）は微細剥片であるため、現状ではどのような工程中に生じたものかを特定することはきわめて難しい。ただし（3）のような石刃が連続的に取られる段階に取られる剥片でもなければ、（4）の背付尖頭器の仕上げ段階に生じた剥片でないことは指摘できよう。しかしそれよりも確実なのは、少なくとも繩文時代以降に典型的なメトードとして出現する石礫などの小型の両面調整の調整工程中に生じた剥片でないということであろう（栗田2012）。この点からも旧石器時代の所産とすることは許されよう。

以上のことから、今回出土した甲田遺跡の旧石器には、（4）のような石刃を素材にした背付尖頭器を製作するためのメトードのほかに、なにを作ろうとしたのかの特定はできないものの、少なくともここでみる背付尖頭器とは異なるメトードの石器製作のあったことが想定される。この点を解明するためにも、良好な出土状況での資料が望まれる。

参考文献

- 栗田 薫（2012）「3. 出土遺物」，《喜志遺跡III一介護施設の建設に伴う発掘調査報告（KS2011-1）》，（富田林市文化財調査報告49），（とくに図3）。

報告書抄録

| | | | | | | | |
|----------------|--|------|-------|-------------------|--------------------|----------------------------|---------------------------|
| ふりがな 書名 | こうだいせき | | | | | | |
| 副書名 | 甲田遺跡 | | | | | | |
| シリーズ名 | 農地整備に伴う発掘調査報告（KD2011-1） | | | | | | |
| シリーズ番号 | 富田林市文化財調査報告 | | | | | | |
| 編著者名 | 50 | | | | | | |
| 編集機関 | 角南 氏馬（編）栗田 薫 | | | | | | |
| 所在地 | 富田林市教育委員会 | | | | | | |
| 発行年月日 | 〒584-8511 大阪府富田林市富盛町1番1号 TEL 0721-25-1000(代) | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 発掘期間 | 発掘面積 (m ²) |
| こうだいせき 甲田遺跡 | | 市町村 | 遺跡番号 | 34° 29' 45" | 135° 35' 39" | 2011.6.27 ～ 2011.7.8 | 83 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | |
| 甲田遺跡 | 集落 | 中世 | ピット、溝 | 土師器、瓦器 | | 旧石器時代のサヌカイト資料を確認 | |